

暴君専務は溺愛できあいコンシエールジュ

## 目次

番外編	暴君専務は溺愛 <small>でせあひ</small> コンシエールジュ	5
心も身体もあなたで癒 <small>いや</small> して		229

暴君専務は溺愛できあいコンシエールジュ

## プロローグ

「秘書は必要ない」

耳を疑った。

いや、その言葉を発した人間を疑った。

「そんなものは欲しいと思っただこともないし、用意しろと言ったこともない。俺には不要だ」

淡々と言い放つ人物を、笹山久瑠美は言葉もなく呆然と見つめる。正確には、彼の口元ばかりを見ていた。これから自分の上司になる人物が発した言葉とは思えなかったからだ。

本日付で上司になる平賀拓磨専務。まだ三十一歳だという若さに加え、噂どおりの男前だ……と、久瑠美は思う。

ハッキリと言い切れないのは、彼が手元の書類に視線を落としているせいで、顔を正面から見る事ができないからだ。

しかしながら、うつむき加減でも綺麗な顔をしている……と感じるので、イケメンなのは間違いないだろう。

(いや、角度的にイケメン、とか……。正面はそうでもないかも)

この深刻な状況下で、久瑠美の脳はまったく余計なことを考え出す。

本来は、秘書として初出勤したこの記念すべき日に、ボスになる予定の専務から「いらない」と切り捨てられてしまったことを深刻に考えるべきなのだが。

とはいえ、そんな扱いを受けているのが信じられないのだ。だから、これはなにかの冗談だと脳が判断して、余計なことを考えさせているのかもしれない。

専務のデスクの前で直立したまま、久瑠美はどうすることもできない。彼女をここへ連れてきた副社長は、とうに退室している。気まずい沈黙が流れる専務室には、自分と拓磨しかいない。

必要ないと言い放ったまま、拓磨は久瑠美を見ようともしない。

まったくの無関心だ。これ以上に居心地の悪い状況があるだろうか。

久瑠美は身体の前で重ねた両手をグッと握り合わせる。気まずい雰囲気だからといって、このままにいるわけにはいかない。

「そうおっしゃられましたが、わたしも困ります」

久瑠美が冷静に言葉を紡ぎ出すと、拓磨の手が静かに止まる。だが相変わらず目は書類に向いているので、久瑠美の言葉で止まったのか、それとも書類に気になる部分を見つけただけなのか、いまいちわからない。

それでも久瑠美は良いほうへ解釈し、言葉を続けた。

「わたしはすでに、以前の会社を退職しております。もちろん、こちらで秘書として採用していただけからです。今さら『いらぬ』と言われても、聞き入れることはできません」

拓磨がゆっくりと顔を上げた。すぐに視線がぶつかって、久瑠美はハッと息を呑む。

真正面から見ると、彼の眉目秀麗さに驚いた。突き刺さるような眼差しさえも美麗で、デスクドールにも似た雰囲気がある。

思わず目を見開いてしまったら、拓磨がかすかに口角を歪めた。それはまるで、久瑠美を嘲笑っているかのようで……

(み、見惚れてた、とか思われてないわよね!?)

にわかに焦りが走る。そんな久瑠美から目を離さないまま立ち上がった拓磨は、デスクを回りこむようにして彼女の横に立った。

そして、いきなり久瑠美の顎を掴むと、グイッと乱暴に顔を上向かせる。

なんの言葉もなく、この扱いはひどい。ひるみかかった心を奮い立たせ、久瑠美は強固な眼差しで拓磨を見返す。

拓磨の眉がピクリと動くが、彼は特に不快な顔をするわけでもなく、すぐに手を離れた。

「睨みつけられたのは初めてだ」

「は……？」

「確かに、初日から『いらぬ』と言われても困るだろう……。わかった」

独り言のような声ではあったが、納得してくれたいらしい。わかった、と言ってくれたのだ。このまま職を失うことにはならないだろう。

だが安堵している久瑠美の前で、拓磨は綺麗な顔にニヤリと邪悪な影を漂わせる。

ぞくつと……おかしな寒気がした。

いい天気だ。

窓の外には抜けるような青空が広がり、清々しさを感ずる。

ついぼんやりと考えるから、久瑠美はハツとして気持ちを引き締めた。

今は仕事 중이다。そんな悠長なことを考えている場合ではない。

……とはいえ……

「はあ〜」

溜息を声に出し、何気なく向けていた大きな窓から目をそらす。

視界に映るのは、広く立派な室内。入口から近い場所と奥まった場所に、それぞれ応接セットが置かれている。奥のほうが明らかに豪華なので、手前は打ち合わせ用なのだろう。

スチール書庫は優しいクリーム色。明るい壁紙との統一感も生まれていて、堅苦しさを感じさせない。眺めのいい窓が壁いっぱいになり、その前には重厚で大きなデスクがある。デスクの主こそ不在だが、そこに座る姿が脳裏に浮かぶ。

彼——平賀拓磨の、研ぎ澄まされた眼光とともに……

ぶるつと小さく身震いをして、久瑠美はそこから目をそらす。視線を落とすと、目の前に置かれている電話が鳴った。

「お電話ありがとうございます。平賀コーポレーション専務室……」

『あーっ、平賀専務さん、いらつしやいますかっ！ 至急の用件なんですよ！』

久瑠美が名乗り終わらないうちに、テンションの高い男の声が聞こえてくる。またもやこの手の電話かと思いつつ、久瑠美は落ち着いた態度で相手の身分を確認した。

どうやら外車のディーラーらしい。車にあまり興味のない久瑠美でも知っている有名な高級車を扱うメーカーだ。

『先日お話されていた限定車種で、ご希望のカラーを見つけたのでご連絡をとりたいんですよ。別の販売店に在庫が残っていたらしいんですよ。それで、今押さえさせているんで……』

名立たる高級車の限定モデルならば、さぞかし値段も張るのだろう。男の張り切りようたるや、受話器を離しても耳が痛いくらいだ。

「申し訳ございません。平賀は只今外出しております。戻りましたら、その旨お伝えいたしますので……」

『急ぐんですよー！ なんとか連絡つきませんか!?』

「申し訳ございません。こちらからは連絡がとれない状態になっております」

一刻も早くと訴える青年に、久瑠美は冷静な一言を突きつけ、「必ずお伝えいたします」と強調

して通話を終えた。

話しながらとっていたメモをもとに、電話があった時間と相手、用件をタブレットに打ちこんでいく。午後の三時を過ぎているが、今日かかってきた電話の中では一番必死さの伝わる口調だったかもしれない。

「だけど……、本当にこつちからは連絡がとれないんだもの……」

ポツリと呟き、小さく息を吐く。拓磨宛てにきた電話のリストを眺めていると、なんとなくモヤッとした気持ちになつてきた。

ここ、平賀コーポレーションは、大手ゼネコンと肩を並べるトップクラスの建設会社だ。久留美が秘書として抜擢された……はずの平賀拓磨専務は、この大企業の将来を担う社長令息である。

なのに……

「なんなの……これ」

リストに並ぶ用件は、どう考えても仕事に関係なさそうなものばかり。

証券会社の勧誘しかり、水商売らしき女性からのお誘いしかり、今のように車やらスーツやらのセールスしかり。

すぐにでも専務にお伝えしなくては、と思わせる電話が一本もないのは、どういうことなのだろう。

仮にも大企業の専務なのだ。どう考えてもおかしいような気がする。

(それとも、会社が大きくて顔が広いゆえに、雑多な用件も多い、とか?)

今までの秘書がどんな人物だったのかは知らないが、もしそうだとしたら、こんな電話を律儀に捌きながら仕事をしていたのだろうか。

と、ここでちよつとした不安が生まれた。

久留美は、拓磨から涼しい顔で告げられた今朝の言葉を思いだす。

『おまえの仕事は、あれだ』

彼が指さしたのは、専務室の一角——スチール書庫の前に置かれたデスク。今まさに、久留美が座っている場所だった。

『俺は出かけてくる。夕方まで戻らない。ついてくる必要はまったくないから、ここで電話番号をしている。記録用のタブレットはデスクの引き出しの中だ』

一瞬、なにを言われているのかわからなかった。

自分はこの人の秘書になったはずなのに、外出に同行しなくてもいいなんて。あまつさえ、専務室に残って電話番号をしているというのだ。

大切な電話がくる予定だから、などの理由があるのならともかく、かかってくるのはさほど重要でもなさそうな電話ばかり。

今朝、秘書なんかいらなと言われたときは驚いたが、いきなり辞めさせられるわけではないとわかってホッとしたというのに。

この扱いはなんだろう……

「わけわかない……」

本日、何度目になるのかわからない溜息。秘書という役目をもらったはずなのに、専務がどこへ行って、どんな仕事をしているのかもわからない状態だ。

もちろん秘書として雇われたのだから、基本情報くらいは頭に入っている。

拓磨が業界でも一目置かれるほど有能で、そのぶんかなり仕事に厳しい人物でもあること。

今は古い雑居ビルの建て替え事業を行っているということ。

過去の実績や、手がけた物件も知っている。

取引のある土木関係者の中には、彼の頼みでなければ動かない人さえいるという。

『すごいね、久瑠美ちゃん。あんな一流企業に引き抜かれるなんて、大抜擢じゃないか』

ほんの数日前まで、久瑠美が秘書として勤めていた小さな会社の社長は、まるで自分の娘が出世したかのように喜んで激励してくれた。

実際、彼には実の娘同様にかわいがってもらっていたのだ。

久瑠美の両親は、彼女がまだ幼いころに他界している。社長は亡き父の兄で、久瑠美にとっては伯父にあたる人だった。

伯父夫婦には子どもがいなかったもので、両親を亡くした久瑠美を引き取り、大学まで行かせてくれた。伯父の経営する土木建設会社に就職したのは、少しでも手伝いをして伯父の力になりたい、

と思ったからだ。

なので、引き抜きの話がきたときはすぐに断った。しかし伯父は、若い久瑠美の将来を見据えていた。広い舞台へ出て、もっと輝けるようにと願い、背中を押してくれたのである。

『笹山さんは優秀だから、すごいところに目をつけてもらえたね。もっともっと活躍できるよ、笹山さんはできる子だもん』

一緒に仕事をしてきた先輩や、現場の作業員たちも、誰一人として久瑠美の転職を咎めなかった。むしろ彼女を応援し、笑顔で送り出してくれたのだ。

伯父の会社は平賀コーポレーションの下請けで、社長秘書と雑用係を兼任して動き回っていた久瑠美に、平賀コーポレーションの副社長が直々に引き抜きの打診をしてきた。

『うちの専務の秘書を探しているんだ。君のように真面目で頭の切れる女性なら、適任だよ』  
提示されたお給料や手当などの条件は格段によかった。

それになんといっても、業界有数のビッグネームだ。周囲が転職を勧めるのも当然だろう。

久瑠美としては、温泉のように居心地のよい職場を離れるのはためらわれたが……

——伯父さん夫婦やみんなの気持ちに応えるためにも、頑張ってみよう。

そう、決心したのである。

みんなの期待を背負い、さらなるやりがい求めて転職したはずなのに……

いろいろ考えていると、なんだか胸がモヤモヤしてくる。今朝の拓磨の態度からして、間違いな

く久瑠美は歓迎されていなかった。

そう考えると、ますます不安になってくる。

ぜひとも専務秘書に、とのせられて転職を決めたものの、当の拓磨には今日初めて会った。事前に挨拶しておいたほうがよいのでは、と副社長に確認したが、かえってしないほうがいいと言われ、それに従ったのだ。

(もしかして、なんの挨拶もなくいきなり来たから、へそを曲げられた……とかじゃないわよね……。副社長に言われたから、そのとおりにしただけだし……)

考えこんでいる頭に、電話の着信音が聞こえてくる。一日じゅうこの音を聞いているので、一瞬、脳が錯覚を起こしたのかと思った。

しかし気のせいではない。電話に目を向けると、ディスプレイに【ヒラガセンム】という文字が見える。その瞬間、頭で考える前に受話器を取っていた。

「専務、お疲れ様です」

自分が置かれている状況に不安はいっぱいだが、表向きは冷静な声を出す。

電話の向こうの相手は一瞬沈黙したものの、すぐに反応を返してくる。

『よく俺だとわかったな』

「電話機に、ヒラガセンムと表示されましたが？」

『以前いた秘書が、番号を登録していたんだろう。……余計なことを……』

「専務からのお電話には、特に注意を払えるようにしたのでしよう。真面目な方だったのですね」

『さあ？ どんな顔だったかも覚えていないな』

(ひどい……)

久瑠美は内心、本音を呟いてしまう。やはり以前の秘書たちも、今の久瑠美のように電話番号をさせられることが多かったのだろうか。だが、顔も覚えていないとはなんたることか。このぶんだと名前なんか絶対に覚えていないだろう。

あまりのことに言葉を失っていると、自分の発言などまったく気にしていないらしい拓磨から、不可解な指示が飛んできた。

『帰っていいぞ』

「は？」

『もうすぐ定時だろう？ 定時を過ぎてからの電話なんか受ける必要はないから、帰れ』

定時を過ぎてまで働く必要はない、さっさと帰れ……というだけなら、とつてもホワイトな会社だと思おう。

しかし、本当に帰ってもいいのだろうか。いや、せめて上司が戻るのを待ったほうがいいだろう。「ですが、専務のお戻りを待ってから……」

『俺が戻るのには定時を過ぎる。今朝の様子を見るに、俺が戻らなければ定時を過ぎてもクソ真面目に電話番号をしていそうだからな。一応言っておいたほうがいいと思っただ』

「お……おそれいます……」

とは言うものの――

(なんなのよー、それ!!)

久瑠美は叫ばずにはいられない。ただし心の中で。

(クソ真面目に、とか、なんなのよ!! 電話番してろって言ったのはそっちでしょお! 指示を出したボスが戻ってくるまで待っているのは当たり前じゃないの! それを、そんなイヤそうにっ!!)

「お、お忙しいところ……わざわざお電話でお伝えくださり恐縮です……。では、定時になりましたら上がらせていただきます……」

久瑠美は平静を装い、人当たりのいい声を出す。しかし受話器を握る手には汗がにじんでいる。もう片方の手は膝の上で固く握られ、プルプルと震えていた。

「ですが、専務宛ての伝言をいくつか預かっておりますので、それはお伝えしておいたほうが……」

『その必要はない。たいしたものはないだろうし、聞くだけ無駄だ』

「はあ……」

あまりにもアツサリ言われて、気の抜けた声が出てしまう。ということは、たいして重要でない電話しかこないことをわかっていて、あえてその番をさせていたということになる。

「あの……ですが、至急専務に連絡をとりたいとおっしゃっていた方もいて」

『たいがいみんな、そう言うだろう?』

確かにそうだ。しかし久瑠美は、めげずに外車ディーラーの件を伝えた。

『ああ、あの男か。あまりにしつこいから、限定モデルの中でも特に珍しいカラーを指定したんだが、よく見つけたな。根性は認める』

さぞかし高額な限定車なのだろう。思わせぶりの態度をとられれば、必死になるのは当たり前だ。「それでしたら、ご連絡してみてはいかがでしょう? かなり急ぎのご様子でしたし」

『必要ない。同情しているなら、おまえが買ってやればいいんじゃないのか?』

「……免許を取得しておりませんので……」

自分の声が乾いているのがわかる。

いまだかつて、仕事でどんなに腹立たしいことがあると、態度どころか声にも出したことはない。だが、このとき初めて、久瑠美は少々不機嫌な声を出してしまった。

駅の改札を抜け、ホームへ向かう。その足取りは重かった。

まだ電車は来ていない。電光掲示板に視線を向けたまま、久瑠美は無人のベンチにストンツと腰を下ろした。

こんなふうに座ってしまうのは初めてだ。いつもはどんなに疲れていても、しっかりとホームに立って電車を待っているのに。

つまりはそれだけ、久瑠美は疲弊<sup>ひへい</sup>していたのである。  
深く溜息<sup>ためいき</sup>をつき、ホームの天井を仰ぐ。

「……なんなの……、あの会社……」

文句というよりも弱音。そんなトーンの声が出ていた。

いっそ大きな声で叫んでしまおうか。そうしたら、この胸のモヤモヤも少しはスッキリするかもしれない。

しかしホームの雑踏<sup>ざつたつ</sup>から生じる物音は、この規模の駅にしては小さい気がする。ここで叫べば久瑠美は間違<sup>まちが</sup>いなく注目を浴び、会社に不満を持ったOLが自棄<sup>やけ</sup>になっていると、同情の目を向けられるに違いない。

(以前の駅なら、うるさいくらいだったのに)

今日からは、利用する駅も電車も変わった。以前の会社は久瑠美が住むアパートからそんなに遠くなかったたので、気持ちに余裕があつたし、学生の多い時間帯と重なって、行きも帰りもホームはにぎやかだったのだ。

その騒がしさに、久瑠美も元気をもらっていたような気がする。

対して、新しい会社はアパートから遠く、最寄駅の利用者は会社員が多い。どことなく地味な駅で、少々暗くも感じられる。比較的落ち着いた路線のようだが、午後五時の定時を迎えてすぐに会社を出たので、余計に人が少ないのかもしれない。

いつものにぎやかな駅が恋しくなってきた。あの空気に触れれば、この沈んだ気持ちも少しは浮上するのではないだろうか。

「なーに、シケた顔してるのー？」

聞き慣れた声がして視線を横にずらす。すると久瑠美を見下ろす人物と目が合つて、凝<sup>こ</sup>り固まつていた顔の筋肉がふにやりと緩んだ。

「亜<sup>あ</sup>弥<sup>や</sup>美<sup>み</sup>い〜」

「今帰り？ 定時が五時つて聞いてたけど、ピッタリに上がったの？ そんなに忙しくなかった？ 大きい会社の秘書つて大変？」

一気に質問をしながら、日野<sup>ひの</sup>亜弥美は久瑠美の横に腰を下ろした。サブリーナパンツに包まれた細い足を組み、上半身を前に倒して下から覗きこんでくる。気の強そうな大きな瞳が、からかうように久瑠美を見つめていた。

「大きい会社で待遇もいいのに、前のちっちゃい会社より暇？ 最高じゃない」

「暇じゃないわよ……。たぶん」

たぶん。そう、たぶん暇ではないはずなのだ。朝一人で出ていってしまった拓磨が、定時になつても戻つてこれないくらいなのだから。

「亜弥美こそ、こんなところだなにしてるの？ 仕事は？ 今日<sup>けふ</sup>は出社するつて言つてなかった？」  
「行つたわよ、午前中。昼過ぎに帰つてアパートで仕事をしてただけ、今日はこれから行きた

いところがあるからここまで出てきたの」

「そっちは自由でいいねえ」

嫌味でもなんでもなく、本心からその言葉が出る。亜弥美はIT企業でプログラマーをしているのだが、勤務形態がかなり自由なのだという。自宅ですることができる仕事も多く、週に一日しか会社に顔を出さないときもある。

そんな亜弥美は高校時代からの友人だ。なにかと要領のいい彼女とは妙に気が合い、友だちの中でも一番親しくしていた。

大学を卒業して一人暮らしを始めたときから、同じアパートの同じ階に住んでいる。空き部屋をひとつ挟んでお隣さん、という近さ。なので、お互いの近況は常に把握しているのだ。

「そういえば、久瑠美の新しい会社に行くにはこの駅で降りるんだったよなあ、なんて考えていたら、シケた顔してベンチに座ってるOLがいるじゃない？ よっぽど仕事で疲れたのかなって思ったら、久瑠美本人なんだもん。びっくりよ」

「ははははは〜」

乾いた笑いが漏れる。自分はそんなにも、疲れてますオーラを漂わせていたのだろうか。

「所属は秘書課なんでしょう？ 初出勤だったのに、課の歓迎会とかないの？」

「歓迎もなにも……。誰一人として話しかけてこなかったし」

「は？」

身体を起こし、亜弥美は眉を上げる。彼女は驚いたようだが、久瑠美だつて驚いた。

朝、副社長に連れられて秘書課で挨拶してから専務室へ行き、そのままずっと缶詰め状態になっていたのだから、誰とも話せなくても仕方がない。

しかし、定時になり、一応課長に挨拶に行ったときさえ、「ご苦労さん」と目も合わせずに言われたのみ。他の課員に至つては、こちらを気にしている様子はあれど、近寄ろうともしなかった。

なんなのあの会社……。そう言いたくもなるだろう。

(専務どころか、秘書課からも歓迎されてないってことだよね)

そう考えると悲しくなる。新しい職場に希望を抱いて、張り切っていたのは自分だけ、ということではないか。

「久瑠美はさ、いわゆるヘッドハンティングで外部から入社した人材だから、……。なんていうか……。よそ者扱い……。なのかもね。大きい会社って、そういうよそ者を嫌うみたいところがあるんじゃない？」

亜弥美は腕を組んで渋面を作る。久瑠美だつて、無視される原因など他に思い当たらない。やはりよそ者扱いなのかと考えると、肩身が狭くなってくる。

「大丈夫？ 久瑠美。やっていけそう？」

亜弥美にしては珍しく探るように尋ねてくるのは、久瑠美に気を遣ってくれているのだろう。親友に心配をかけて申し訳ない。そんな気持ちで笑顔を作るが、少々元氣のないものになつてし

まった。

「まだ一日目だから……。やっていけないを今決めてしまうのもどうかと思うし、もう少し頑張ってみようかなって……」

「でもさ、さっさと逃げたほうがいい場合だってあるし、本当に駄目だと思ったら、早く見切りをつけちゃったら？」

「見切りっていつても、次の職も決まらないままじゃ……」

「元の会社に話してみれば？ 身内なんだしさ。新しい会社でいじめられたとか言えば、きつとすぐ戻っておいでって言ってくれるよ。あの会社、みんな優しいじゃない」

「できるわけがないでしょう！ そんなこと！ あんなに……みんなわたしのことを考えて、頑張らせて送り出してくれたのに……！」

つい大きな声を出してしまい、久留美はハツとする。近くにいる人が振り返ってもおかしくないほどの大声だったが、ちょうどそのとき入ってきた電車の音に呑みこまれた。

「ごめん……、大きな声出して……」

謝りながらも、久留美はベンチから立ち上がる。待っていた電車がようやく来たようだ。

亜弥美もそれに気づき、立ち上がって笑顔を見せた。

「あたしのほうこそ、ごめん。甘いこと言っちゃって。久留美、そういうの嫌いだもんね。……そうだ、一緒に飲みに行かない？ イヤな気分にはさせちゃったお詫びに奢るよ」

「これから？ どこに？」

「ご飯食べてから、お気に入りのいる店に」

「パス」

せつかくの誘いだが、即答で断る。亜弥美は「やっぱりい？」と言いながら笑っていた。

お互いに手を振り合い、久留美は電車へ乗りこむ。座れるほど空いてはいないが、吊革ゲツトは余裕だった。

窓からホームを見れば、亜弥美が見送ってくれている。手を振ると、彼女も振り返してくれた。

さっぱりした性格で、いい友だちだ。昔から深刻な相談にもものってくれる。

話も合うし趣味も合うが、ひとつだけ、久留美にはあまり理解できない趣味を持っていた。

お酒好きの亜弥美は、飲み歩くのが好きだ。その中でもお気に入りのバーテンダーがいる店には足繁く通う。美人だし、恋人が欲しいと思えばすぐに作れるタイプだと思うが、一時期はホストクラブにもはまっていた。

そういった職種の男性とつきあいたいのかと聞けば、別につきあいたいとかではなく、ただ眺めてお喋りしやべをしてドキドキしたいのだそうだ。それが楽しいのだという。

(アイドルとかに憧れるのと同じ気分なのかな……)

流れ始めた景色を眺めながら、久留美はぼんやりと考える。

だが、男性に対してドキドキするような経験をしたことのない久留美には、いまいち実感が湧か

ない。

(ドキドキかあ……。ないなあ……)

改めて考えてみても、思いつかないあたりが情けない。恋愛願望が強いわけではないが、この歳までそういつた経験がないというのは……。ちよつと寂しい気もする。

伯父夫婦や周りに迷惑をかけないように生きていく。そのことはかりを意識してきたように思うのだ。

(あんなに喜んでくれたのに、すぐに辞めるなんてことになったら、伯父さんと伯母さんだけじゃなくて、みんなを心配させちゃう)

それは絶対に避けたい。だから辞めるなんてことはしたくない。

しかし、それはあの拓磨と一緒に働く覚悟をするということだ。

覚悟……というより、こういう人なんだと理解して割り切り、妥協たきようしていくしかない。

ごくりと喉のどが鳴る。拓磨の鋭い眼光が脳裏によみがえり、ゾクツと冷たいものが背筋を駆け抜けた。

(弱気になってちゃダメ……。まだ一日目なんだから)

とにかく、今すぐ会社を辞めるなんて考えてはいけない。

(頑張ろう)

気持ちを変えて、久留美は流れていく夕暮れの空に目を向けた。

どうせ歓迎されていないのだ。なにをやったつていい顔はされないだろう。

やりたいことをやっても、遠慮してやらなくても同じなら、思うように行動して疎そとまれるほうがマシだ。

翌日、そう自分を奮い立たせた久留美は、勢いよく秘書課へ足を踏み入れた。

「おはようございます！」

どうせ返事なんかしてもらえないはずがないのだから、気取ることなく大きな声で挨拶あいさつをする。そのまま早足で歩き、一応用意されている席へ行こうとしたのだが……。久留美の足は途中で止まってしまった。

忘れ物に気づいた、とか、自分の席がなくなっていた、とかではない。

オフィス中の視線が、すべて久留美に向けられていたからである。しかもみんな、一様に驚きに満ちた表情をしていた。

(な、なに……。?)

異様とも思える光景に、久留美は唾つばを呑んだ。……。そのとき。

「すごい！ 入社してきた！」

「うそおー！ すごい！」

「絶対にもう来ないと思ったのに！」

誰がどれを言っているのかさっぱりわからないが、みんな同じようなことを口にしている。場は騒然となり、あまつさえ拍手まで起こった。

「本当、すごいわあ。あなた、笹山さん、だっけ？」

「はい……」

直接話しかけてきたのは、背の高いパンツスーツ姿の女性だ。派手な顔つきの美人なので一見キツそうだが、口調には柔らかさがある。

「今日は絶対に来ないだろうって、昨日からみんなと噂していたのよ？」

「そ……そうなんですか……？」

「一日じゅう、どうでもいい相手からの電話をとらされていたでしょう？ 普通なら耐えられないわよ。あの嫌がらせで何人辞めていったか……」

あれは嫌がらせだったのか。久瑠美は目を丸くした。

「専務があまり関わりたくない相手には、あの番号を教えるみたいなのよ。だから、たいして重要とは思えないような電話しかこないでしょう？ 仕事関係の電話は、全部専務が持つてるスマホに繋がるようになってるのよ」

秘書なんていらないとハッキリ言われたのだから、嫌がらせをされても不思議ではない。過去にも何人かが同じような扱いを受けているようだ。

「専務は仕事ができる人だから、秘書はいらなくてスタンスなんだけど、やっぱり体裁上、そ

ううわけにもいかないでしょう？ 副社長が気にしてあれやこれや手を回すんだけど、これまで全滅なのよ」

「あ……わたしに声をかけてくださったのも、副社長でした」

「副社長って、社長の弟でね、専務の叔父にあたる人なのよ。たぶん、社長からも専務に秘書をつけさせるって、再三言われているんじゃないかしら。……全滅だけだ」

大事なことなので二回言いますとばかりに繰り返し、彼女は苦笑いをした。拓磨に秘書をつける作戦は、よっぽど上手くいっていないのだろう。

そこで、別の女性課員が口を開く。

「全滅して当然だと思うわ。秘書としてのプライド、滅多斬りだもの。ある人なんて、定時に戻ってきたとき『大丈夫？』って声をかけたら、一日我慢していたものが爆発したのか泣きながら大暴れよ。もちろん翌日から来なくなったけど」

驚くような話だが、今の久瑠美にはその気持ちもわからなくはない。

「それ以来、〃入社初日の専務秘書には話しかけるな〃っていう暗黙の了解ができたのよね」

「そうなのよ。だいたい翌日から来ないし」

二人はうんうんとうなずき合う。どうやら昨日、久瑠美が秘書課の面々から無視されていたように感じたのは、こういう理由があったからのようだ。

ということは、秘書課内で邪魔に思われているわけではないのだろう。

少しホツとして力が抜けそうになったとき、美人にガシツと両手を握られた。

「いつまで耐えられるかわからないけれど、とにかく、頑張つてね！」

「は……はいいっ」

激励はされているようだが、期待はあまりされていないようである。

ただ、昨日の一日で絶望して、早々に辞めようなんて決心しなくて正解だった。

いくら軽くくなった気持ちと足取りで、久瑠美は専務室へ向かう。——そして彼女は、そこでもっとも珍しい……であろうものを見てしまったのである。

目を見開き口を半開きにした、平賀専務のご尊顔だ。

自分が同じ顔をしたなら「なにアホ面さらしてるんだ」と言われそうな表情だが、イケメンがやるとアホ面もイケメンのだと、久瑠美は初めて知った。

しかし、そのだらしないとも言える口から発せられたのは、一瞬耳を疑うような言葉だった。

「おまえ、馬鹿か」

「はいい？」

久瑠美は思わず間抜けな声を出してしまう。

「おまえにはプライドがないのか。よくノコノコとやってこられたな」

ひどい言われようだ。つまりは昨日あれだけないがしろにしてやったのに、よく出社できたなど言いたいのだろう。

昨日の仕打ちが、秘書のプライドをズタズタにするものなのだと、彼はわかっている。

わかっている、あの電話番号をさせたのだ。

——おそらく、自主的に辞めるよう仕向けるために。

彼は、秘書というものをまったく必要としていない。改めて、悔しいほど思い知らされた。だが……

久瑠美は拓磨のデスクの前に立つと、彼をまっすぐに見据えた。

「わたしには、専務の秘書としてのプライドがあります。それに従って出社するのは当然だと思えますし、馬鹿でもないと思います」

すると、久瑠美を面白そうに見ていた拓磨の目が、いつもの鋭さを取り戻す。彼は先程の発言など気のせいであつたかのように、冷静な声で言った。

「どうやら昨日の電話対応は完璧だったようだ。リストも実にわかりやすかった。着信時間、相手内容、おまけに通話にかかった時間まで。ああ、そういえば、声の様子から想像できる至急レベル」  
「っていう項目は面白かったな。あんなものまで作っていたのはおまえが初めてだ」

「ありがとうございます。それと僭越ですが専務、わたしの名前は笹山です。頭の片隅にでも留め置いていただければと思います」

褒められたことには素直に礼を言い、ひとつ不満に感じたことだけ、やんわりと申し出る。昨日から「おまえ」としか呼ばれていないのが気になっていたのだ。

わざとそう呼んでいたのなら嘲笑ちやうしょうされるかと思ったが、拓磨は今思いだしたと言わんばかりの顔を  
する。

「ちよくちよく代わるので覚える気もなかったが、そういうえば副社長に紹介されたとき、そう聞いた覚えがある」

正直ではあるが、ひどい話だ。

(覚える気、まったくナシってことですか)

内心でムツとしつつも、それを口にはしない。確かに一日で辞めてしまう人間ばかりなら、名前を覚えるのも面倒になるだろう。どうせ明日は来ないだろうからと、久瑠美に関わろうとしなかった秘書課の面々だって同じだ。

(でもっ！ 辞めさせているのは自分じゃないのっ！)

拓磨が秘書に無関心すぎる理由はわかったが、そもその原因に気づいて久瑠美の心が叫ぶ。

「さて、笹山」

そこで話を交えようとするかのように拓磨が立ち上がった。初めて名字を呼ばれた驚きで、久瑠美の背筋がピツと伸びる。

「は、はいっ！」

ゆっくりと近づいてきた拓磨が久瑠美の肩にポンツと手を置き、にやりと笑った。

「今日も、頑張れ」

彼がくいつと顎あごをしゃくった先には、昨日久瑠美が一日じゅう座っていた電話番号のデスクがある。

今日もあそこで、与えられた役目だけこなせと言いたいのだろう。

「俺は外に出る。定時になったら帰っていいからな」

「えっ……あ、もう出られるんですか？」

「出るが？ おまえは電話番号だからついてこなくてもいいぞ」

先手を打ったつもりなのだろう。再び「おまえ」呼びで、拓磨はスパッと切り捨てた。

あまりにも早い切り返しに一瞬ひるんでしまうが、せめてなにかコミュニケーションをとって自分の存在を覚えておいてもらわなくては。

「ひと息ついてからお出かけになってはいかがでしょうか？ コーヒーでもお淹いれします」

「雑巾のしぼり汁でも入れられたら面倒だ。そんな心配をするくらいなら金を出して買って飲む」

……返す言葉が出てこない。

背を向けてさっさと出ていく拓磨を見送り、閉まったドアを見つめたまま、久瑠美は呆然と立ち尽くす。

(雑巾……とか……。今どきそんなことする人がいるんですかっ!?)

もともと人間関係の円満な職場にいた久瑠美には信じられない話だが、確かに聞いたことはある。しかしそれだって、ただの噂にすぎないのではないかと思っていたのだ。

(もしや、やられたことがあるとか……やられそうになったことがあるとか……でも、まさか、そんなことをする人が本当にいるなんて……でも、あの専務ならやられてもおかしくない……)そこでふと、仕事からみとは限らないことに気づく。

あれだけの美丈夫だ。きつと、女性にも盛大にモテるに違いない。

(痴情のもつれで、そういう目に遭ったことがあるとか……)

決して考えられないことではない。頭が余計な詮索をしそうになったとき、電話番用デスクから着信音が鳴り響いた。

「はいはいはいっ」

急ぐ気持ちを口に出してデスクへ駆け寄る。おかしなことを考えている場合ではない。久瑠美は受話器を持ち上げ、耳に持っついていきながら、チラリとディスプレイを見た。

【セムムノ アレ】

そこには番号ではなくカタカナが表示されている。なんのことかと気にする前に、久瑠美は声を発していた。

「お電話ありがとうございます。平賀コーポレーション専務室、秘書の笹山でございます」

昨日、散々繰り返した言葉が自然と出る。……が、応答がない……

「もしもし?」

確認しても相手は無言だ。

電話機の不調だろうか。それとも……

いろいろ考えたような気はするが、その間、おそらく数秒。電話はすぐに切れてしまった。

耳から離れた受話器を眺め、久瑠美は首をかしげる。今のはいったいなんだっただろう。ただの悪戯だろうか。

いや、【セムムノ アレ】と表示されたということは、番号が登録されているのだから、初めてかかってきた番号ではない。おまけに拓磨がらみと思われる。

「アレって……なんだろう」

もしかしたら拓磨のもうひとつの番号だろうか。仕事の電話を社用のスマホで管理しているのなら、プライベート用に別のスマホを持っていてもおかしくない。

今かけてきたのが拓磨だとすれば、久瑠美が真面目に仕事をしているかどうか、確認の意味でかけてきたのではないか。

秘書はいらないと言った人がそんな確認をするだろうか、とも思うが、ひとまず久瑠美の仕事ぶりを見てみようと思ってくれているのかもしれない。

久瑠美は受話器を置き、ストンツと椅子に腰を下ろす。そしてメモ用のノートを開き、タブレットを起動させて……ハツとした。

昨日作った電話リストの一件一件にチェックがつけられている。口ではあんなことを言いながら、拓磨はすべてに目を通してくれていたのだ。

ただの嫌がらせで電話番号をやらせているのなら、ここまでしないのではないだろうか。

(本当は、部下の仕事ぶりをきちんと見て評価してくれる、いい上司なんじゃ……)

もしそうだとしたら、拓磨は試しているのではないだろうか。

自分は優秀な秘書だと思っている人間にあえて電話番号をさせ、些細な仕事でも真面目に取り組むことができるかどうか……

久瑠美はタブレットを見つめ、うんうんとうなずく。

試されているのなら、それをクリアしなければ。すぐに辞めていった秘書たちは、「こんなくだらないことさせて！」と投げ出してしまい、拓磨の期待に応えられなかっただけかもしれない。

「よし、やろう。雑多な仕事は得意なんだからっ」

拓磨が求める秘書の形が、少し見えたような気がする。久瑠美は俄然やる気になった。

以前の会社では、社長秘書といえど小さな雑用もやっていた。ゴミの分別から使いっぱしりまで。だから雑用は平気だ。

拓磨の期待に応えられれば、秘書としての仕事もさせてもらえるかもしれない。

そう気持ちを切り替えたたん、目の前の電話が鳴る。久瑠美は張り切つて受話器に手を伸ばした。

——そしてこの日も一日、電話番号に明け暮れたのである。

「あと十分で定時かあ……」

スチール書庫に分厚いファイルを両手で押しこみ、久瑠美は腕時計を確認する。今日も早く帰れそうだと感じつつ、書庫のガラス戸を閉めた。

デスクの背後、壁に沿って置かれたスチール書庫には、主要な取引先のデータや物件の資料などが、わかりやすくまとめてファイリングされている。

かなり前のものから最近のものまで様々だが、まとめかたにブレがなく統一されている印象だ。専務秘書が定着していないなら、これは他の誰かがまとめてくれたのだろう。

(大規模な建築物に関する資料も、すぐわかりやすかった。基礎構造とか地盤のこととかは勉強したことがなかったけど、そんなわたしでも理解できたもんね)

誰がまとめているのか、秘書課の人に聞いてみよう。そう考えながらデスクに戻り、タブレットをタッチする。今日の電話リストを確認して、久瑠美はわずかに眉を寄せた。

「四回もきてる……」

ちよつと重い気持ちになってしまうのは、【センムノ アレ】という電話が朝から四回もかかってきていたからだ。

おまけに、すべて無言で切れている。

拓磨が様子を探るためにかけてきているのだとしても、少々しつこくはないだろうか。それに、無言じゃなくてもいいと思う。「調子はどうだ」の一言くらいあってもバチは当たらない。

(不審な電話への対応力とか、試されているのかな)

そうだとしたら、一緒に無言になっていたのはまずかったかもしれない。とはいっても、数秒で切れてしまうので、話しかけるタイミングがつかめなかった。

今度かかってきたら、すぐに話しかけてみようか。……そんなことを考えていた矢先、ノックもなく専務室のドアが開いた。

「いたか。間に合ったな」

入ってきたのは拓磨だった。定時前に戻ってくるとは思っていなかったもので、久瑠美は「専務!?」と驚いた声をあげてしまい、呆れたように鼻で笑われてしまう。

きつと、そんなおかしな声をあげるほどのことかと思われたに違いない。

(でも、鼻で笑わなくなっただけいいと思う……)

かすかな不満は覚えるが、久瑠美はにこりと笑って頭を下げた。

「お疲れ様です。定時までに戻られるとは思いませんでした」

「戻ってくる気はなかったんだけどな。戻ったときに人がいると鬱陶しいし」

「あはは、そうですね……」

笑い声が乾く。すいませんね！ と心で叫んだとき、久瑠美のデスクになにかが置かれた。

なんだろうと見てみれば、近くにあるコーヒースタンドのマークが入ったカップだ。久瑠美がときどき買うスモールサイズより少し大きい。

「甘いものは大丈夫か？ ものすごく甘いから、おまえにやる」

「え？ わたしに、ですか？」

意外なサプライズに驚きつつも、笑みが浮かびそうになる。だが、それを阻止するかのごとく拓磨が理由を口にした。

「午後から会議で、そのあと副社長にもらった。『疲れているだろうから甘めにしておいた』とか言われたから、かなり甘いぞ。俺が甘いものは苦手だと知っているくせに、たまにこういう余計なことをする」

「かなり甘いつて、どうしてわかるんですか？ 飲んでいないのでは？」

「副社長はただでさえ甘党だ。あの人の『甘くしておいた』は、俺にとっては飲みこめないレベルの甘さだ」

それはすごい……。拓磨はよっぽど甘いものが苦手なのだろう。意外なところで、彼に関する新情報を得てしまった。

久瑠美は「ありがとうございます、いただきます」と言ってからカップに口をつける。

別に飲みこめないほど甘いわけではない。ちよつと甘くなっちゃったけどいいか、くらいのレベルだ。

甘いものは特に好きでも苦手でもない久瑠美がそう思うのだから、甘党の副社長なら物足りないくらいだろう。

(副社長も、専務の好みを考えて控えめにしてくれたんじゃないかな)

ちょうど終業前で喉が渴いていた。程よい甘さが心地よくて、久瑠美は一口、二口とコーヒーを飲み進める。

「相変わらず、今日もシツカリ記録しているんだな」

タブレットを手に取った拓磨が、本日の電話リストをスクロールする。だが、ある一点で止まり、そこを凝視しているようだった。

「ゼンムノ アレ」って、なんだ？」

不思議そうな声に白々しさを覚え、久瑠美はわずかに口元を歪める。

「着信時間を見てください。身に覚えがあるのでは？ 全部無言だなんて、なにか思うじゃないですか。様子を知りたいのなら、そんなことをしなくたって……」

「なんのことだ？ これが俺からの電話だとも思っているのか？」

「違うのですか？」

「おまえの様子を気にするほど暇じゃない。そんな無駄なことをする気もない」

カチンとくる、という感覚は、きつとこういうことなんだと久瑠美は思う。あんまりな言いかたをされて不快な気持ちになる。

「専務じゃないなら誰なんですか？ おそらく以前からかかっている電話だと思えますよ。」

「ゼンムノ アレ」で登録してありましたから。つきり、専務のプライベート用の電話番号なのかと思いました」

なにか思い当たることがあったのか、それとも関心を失っただけなのか、拓磨はタブレットを置き、自分のデスクのほうへ歩いていく。

「さっさと飲んで帰れ。リストはあとで見ておく」

「専務は……」

「仕事だ」

「お忙しい専務を残して、秘書が帰るわけにはいきません」

「おまえに与えた仕事は定時までだ」

せめてもの思いで口出ししてみたが、アツサリと返される。椅子に腰を下ろした拓磨は目の前のパソコンを起動させると、それつきり無言になり、久瑠美のほうを見ることもしない。

なにを言っても無駄だろう。【ゼンムノ アレ】という電話は、久瑠美の様子を探ろうとして拓磨がかけていたものではない。ということとは、拓磨は本当に、まったくといっていいほど、秘書というものに興味も関心も持っていない。

少しでも気にしてくれていると思った自分が馬鹿みたいだ。

程よく甘かったはずのコーヒーが苦く感じられてきた。久瑠美はそれを一気に飲むと、早々に専務室を出た。

——久瑠美が専務秘書になって、早くも二週間が過ぎた。

とはいえ、仕事は相変わらず電話番号と、その他雑用だけで、秘書らしいことは一切させてもらえていない。

「すごいわ！二週間も続いた人なんて、私、初めて見たわ！」

ちょうど二週間目となる金曜日。定時を迎えたので帰ろうとした際、感動した様子で久瑠美の両手を掴んだのは、入社日の翌日、最初に声をかけてくれた美人の先輩——岸本百合である。

周囲にいた秘書課の面々からも、よくやったとばかりに拍手が沸き起こる。はた目には大袈裟な反応に見えるだろうが、これが決して大袈裟ではないのだということを、久瑠美自身がよく知っていた。

あの専務のもとで二週間も働いたのだ。自分で自分を褒めてあげたい。

「笹山さん、来週も来る？来てくれる!？」

「ははははいっ、来ますっ」

睨みつけるような必死な形相で言われ、思わず腰が引ける。しかし両手を掴まれているので逃げることはできなかった。

これは、二週間も仕事が続いた変わり者をここで逃してなるものか、ということなのだろうか。

久瑠美が戸惑っていると、その手をがっしりと掴んでいた手が離れ、鬼気迫る形相だった百合がパッと笑顔になった。

「よかった。じゃあ、来週は歓迎会ね」

「……え？」

キョトンとする久瑠美をよそに、百合とその周囲は盛り上がる。

「平日だと各自の担当役員のスケジュールなんかも絡んでくるから、たぶん土曜日になっちゃうと思うけど、その辺は週明けにでも相談しましょう」

周囲から「OK」「賛成」という声が飛び、通りすがりの課長からも「了解」の一言が出た。

意味はわかるのだが、久瑠美は呆然としてしまう。

なにせ歓迎されている、という実感はまだない。

「あの……、歓迎会って……」

「なにをビックリしているの？笹山さんのに決まっているでしょう？こんなに頑張ってくれているんだもの、もう大丈夫よね？辞めないわよね？」

「え……はい、あの……」

「よし、確かに聞いたわよ。お酒は大丈夫？なんでも飲めるほう？なんかかわいい雰囲気だから、サワーしか駄目ですう、とか言いそう」

「い、いいえ、結構いける口で……」

意外な答えだったのか、「おおっ」と周囲が沸いた。加えてお酒に関してはうるさい、もとい精通しているらしい課長が話に加わり、さらに場は盛り上がって……

久瑠美はこの日、帰宅の電車を数本逃すことになったのである。

自分は、あの会社の秘書課の一員になれたのかもしれない。

そんな実感が湧き、感動さえ覚える。

頑張ろう。辞めないだけであんなに盛り上がってくれて、歓迎会まで開くと言ってくれた課員たちの期待に応えられるように。

——とはいえ……

「これ以上頑張りようがないのよ！ ほんとっ！」

苛立ちのままに叫び、久瑠美は膝の上にかかえていた細長いクッションにバフッとこぶしを入れた。

八つ当たりよろしくボスボスとクッションを殴る久瑠美を見ながら、亜弥美がアハハと声をあげて笑う。

「久瑠美がこんな荒れるなんて珍しいよね。よっぼど……なんだね、その専務」

「よっぼど、っていうかなんていうか、秘書っていう存在自体が、あの人の眼中にはないのよ。それじゃ頑張りようなんて……あーっ、もうっ」

頑張りたいのに頑張れない。仕事がしたいのにさせてもらえない。複雑すぎるジレンマに奥歯を噛みしめ、久瑠美は上半身を倒してクッションに頭をうずめた。

帰る間に秘書課で話しこんでしまったこともあり、今日はアパートに帰るのが少し遅くなった。

亜弥美の部屋の前を通り過ぎたとき、足音で気づいたのかドアが開き、「いつもより遅いから、どうしたのかと思った」と彼女が顔を出した。

亜弥美も夕食はまだだということで、デリバリーでも頼んで一緒に食べよう、ということになったのである。

着替えてから亜弥美の部屋へ行き、ピザやチキンをつまみながらビールを飲む。アルコールに流され……たわけではないと思うが、秘書課の面々が意外と気さくでいい人ばかりだという話からいつの間にか拓磨に対する愚痴へと変わってしまったのである。

「でもさ、これまで一日で辞めた人ばかりなのに、久瑠美は二週間も続いているんでしょう？ そのあたり、専務は認めてくれないわけ？」

亜弥美はローテーブルに置いたノートパソコンをカチャカチャと叩きながら、もつともなことを口にする。横にはコンパクトなデジカメがあるので、きつと画像の整理でもしているのだろう。

向かい合わせになっているため、どんな画像かは見えないが、別に気にはならない。そんなものを気にする前に、頭の中は拓磨への苛立ちでいっぱいになっていた。

「認めていけば、なにかしら仕事を任せてくれるでしょう？ ああ、そうだ、電話のリストを作るのが上手いと言われたわよっ」

「なんじゃそりゃ。でもさ、秘書として雇われたのに、これでお給料をもらうなんて申し訳なくて……とか、ちょっと謙虚なことでも言ってみたら？」

「とつくに言ったわよ。そうしたら……」

あれは今週の初めだった。毎日電話番をしているが、ひっきりなしに電話がくるわけではないので、簡単な仕事でいいから任せてくれないかと頼んだ。すると……

『おまえの後ろにあるものはなんだ。ただの壁か？ その書庫には、今まで俺が手掛けた案件や取引先の実績がファイリングされている。それらを読むということは、俺の仕事を知ること、ひいてはこの会社を知ることだ。おまえにはそんな気概きがいもないのか』

読め、なんて一言も言われたことはない。そのくらい自主的にやるつもりもないのかと言いたいのだろう。

しかし、書庫の資料など入社から一週間で軽く網羅もうらした。

そのことを言えば言ったで……

『一度目を通したくらいでわかった気になるな。暗記するつもりで読みこめ。違うものがないのなら資料室に山ほどあるぞ。創業百年になるこの会社の歴史に触れてこい』

秘書の仕事など、させる気は微塵みじんもないのがわかる。

それでも「必要がないからクビだ」とまでは言わないので、少しは人としての情がある……と思いたい。

「でもね、その専務、一日じゅう外出しているんでしょう？ 事務処理とかはどうしてるの？ 手が回っていないんじゃないの？」

「事務処理も自分でやってるみたい。誰かが任されてるっていうのは聞かないし。あと、書庫にあるファイルの整理も全部専務がやってるらしくて……。なんなの、あの人……。実は分身の術とか使えるんじゃない？」

「それだったら、いくらでも一人で仕事ができるよねえ」

亜弥美は面白そうに声をあげて笑うが、久瑠美はいまいち笑えない。拓磨は一人で執務室にいたりとき、こっそり分身しているんじゃないかと、本気で思ってしまう。

思わず大きな溜息が出る。テーブルからチューハイの缶を取ろうとしたとき、亜弥美が笑顔でパソコンをぐるりと回転させた。

「まあまあ、そんな暗い気分るときはさ、あたしのイチオシでも見てよ。ほら」

モニターの中では、蝶ちようネクタイ姿の王子様系イケメンが微笑んでいる。バックにはズラリと並んだアルコールのボトル。どうやら亜弥美が足繁く通っている飲食店の店員らしい。

「ふうん……。イケメンだけど、ちょっと素朴な感じ？」

「そこがまたいいのよ。でも、なに？ その感動の“か”の字もないような反応。『うわあ』って感動のあまり二度見しちゃうような、いい男だと思わない？」

「三度見か四度見はされるんじゃないかと思える上司を毎日見るとね、顔の造りがいいってことに关してあまり感動しなくなるものなのよ」

「そんなにいい男なの？ 久瑠美の上司」

「顔の造りはいいけど、性格は最悪だと思う」

顔が綺麗なら心も綺麗……なんて言う人もいるが、そうとは限らないのだ。絶対に。

あまり興味を持ってもらえなかったのが悔しいのか、亜弥美はパソコンの向きを直す、壁際の本棚を挑戦的に指さした。

「イチオシが、そんな顔だけの男に負けたとあっちゃ悔しいわ。歴代の中で勝てるコいない？ 粒ぞろいだよ」

亜弥美が示す本棚の下段には、彼女のお気に入りのショットを収めたアルバムがある。久留美も話のネタにパラパラと覗いたことはあるが、じっくりと見たことはない。

久留美はチューハイ片手に四つん這いで本棚に近づく。

「亜弥美ってさ、今はほわつとした優しい王子様タイプが好みでしょ？ でも、昔は違ったよね？」

「ん、ひと昔前はオラオラ系かな……。まあ、世間的にも流行ってたしね」

下段の左端に薄いアルバムが三冊ある。一番端のものを引き抜くと、五年前から四年前の日付が書かれていた。

（五年前って……。二十歳になったばかりじゃない）

そのころから彼女にはイチオシ君がいたらしい。しかし二十歳といえば、まだ大学生。亜弥美が学習塾でアルバイトをしていたのは知っているが、そのバイト代のほとんどはこっちの趣味に消えていたのではないだろうか。

（アイドルに入れこむのと比べたら、こっちのほうが身近な存在だし、まだマシ……なのかな）

自分にはわからないと思いつつも、心の中で友を擁護しておく。その場に座ってべらつと開くと、いきなりブラックスーツ姿の集団が目に入った。

全体的に白っぽい内装の部屋で、バックには鳥かごを思わせるような大きな窓。額縁に金や銀の装飾が施された絵画やフラワーテーブルがある。それほど大きくない丸テーブルには、レースのテーブルクロスが敷かれていた。

ブラックスーツの集団といっても、よく見れば四人ほどが写っているだけ。すべて男性だ。メインで撮られている青年だけが、他の人とは少し違うものを着ていた。

おそらくこの青年が、当時のイチオシ君だったに違いない。隠し撮りのように見えるのが気になるが、彼だけを写したものが他にもある。

久留美はページをめくる手を止めた。そのまま写真に釘づけになってしまふ。

（……似てる……？）

湧き上がるのは、おかしな疑問。

まさか……

いや、そんなはずはない……

「あー、それ、懐かしいなあ。トーマさんだ」

横から亜弥美が覗きこんできて、久留美はビクッと震える。

「そんなにビツクリしないでよ。いい男に見惚れちゃったから恥ずかしいの？　そうだよねえ、男に見惚れるなんて久瑠美のガラじゃないもんね」

考え事をしていたときに声をかけられれば、誰だつて驚く。しかし「考え事ってなに？」と聞かれると困るので、久瑠美はハハハと笑つてごまかした。

「……あの、亜弥美……。これは、ホストクラブかなんか？」

「違うよ、よく見て。窓の外が明るいでしょう？　これはね、執事サロン」

「執事サロン……。執事喫茶、みたいなやつ？」

「似てるけど、ちよつと違うかな。なんていうか、執事喫茶より敷居が高くて、ちよつと高級っぽいんだよ。話しかたとか接しかたも、こつちが照れちゃうくらい決まつててさ。……なんとなくわかる？」

まったくわからない……

久瑠美は首を横に振る。亜弥美はその横に座り直し、写真を指さしながら説明してくれた。

「このトーマさんは、サロンのナンバーワンでチーフだった人。だからほら、彼だけ燕尾服えんびふくでしょう？　他のコはブラックスーツだけ」

普通のスーツとは違う、という感想しかなかったが、言われてみれば上着うすせの裾すそが後ろだけ長い。ネクタイも柔らかそうなスカーフタイだ。

さらによく見ると、他の青年は白手袋をはめているが、彼だけ黒、それもショートタイプのもの

をはめていた。

一人だけ特徴のあるスタイルなのに、そちらには目が行かない。久瑠美の視線は彼の顔に釘づけになったままだった。

「いつでも店にいるわけじゃないし、個室のお客さんからのご指名が多くて、ホールで姿を見られたらラッキー、って人だったなあ。あたしもトーマさんに会いたくてさ、当時は毎日通ったわ」

「……あのさ、こつこつ、あの……。いかがわしいサービスのある店……。とかじゃないんだよ……？」

非常に聞きづらいことなので、久瑠美の言葉は途切れがちになる。しかも聞いたそばから亜弥美がアハハと笑うので、もしや凶星では？　とドキリとした。

「うーん、そうだよねえ。久瑠美みたいに興味のない人が個室って聞いたたら、変なこと想像しちゃうよね。でも残念ながら、そういうサービスははないの。ちよつと特殊な喫茶店、って言いかたのほうがかつたかも」

「特殊な喫茶店……」

似たようなものとしては、メイド喫茶あたりだろうか。行ったことこそないが、メイド姿の女の子がかわいくおもてなししてくれるらしい。

それならこの執事サロンとやらも、執事姿のイケメンがおもてなししてくれる店だと考えればよいのだ。